

天保十三年（一八四二）

二月十九日 諸生遊山。放学。午牌與棣園。鉄之助。及家人婢使。散行觀花。順三郎從行。詣黒男祠。遊岳林寺。憩於竹中安兵衛店。（略）發行厨。其家亦供酒飯。申牌帰家。是日天氣清明。彼岸桜正開。未及他花。

などとある。

黒男祠は羽野天満宮で述べた「坂迎え」にかかわって、筑後方面への旅の行き帰りの送迎の場ともなつていていたようである。例えば天保十三年（一八四二）の淡窓の大村行からの帰りにあたつては、

十二月一日朝。石井新作力招ニ応ズ。新作ハ和一郎力兄ニシテ、吉井ノ大庄屋ナリ。伊織・祐之從行セリ。ソレヨリ古賀氏ニ至リ、從母ノ病ヲ訪フ。先日ノ腫物、近比潰エタル由ニテ、床ニ臥シ玉ヘリ。氣力

ハ疲レタレトモ、苦痛ノコトハ無シトゾ。吉井ノ諸子、皆街口マデ送リテ別レタリ。千束町ニ到リテ宜園ノ諸生數人來リ迎ヘタリ。介石其冠タリ。魚屋隆助ヲ訪フ。止メテ酒ヲ饗セントス。辭シテ去リシニ、轎ノ中ニ杯ヲ持チ來リテ、數杯ヲ勧メタリ。隈上ヲ過グ。玉井養純、浅井恒吉、出テ迎ヘテ。茶菓ヲ饗ス。保木ニ到ル。諸生數十人、此處ニ相マテリ。長谷ニ到ル。範治、諸生十余人ヲ卒キテ來リ迎フ。一店ヲカリテ、齋斯所ノ行厨ヲ發シテ、予ニ羞ム。時ヲ移シテ出ツ。入江ノ浮橋ニ到ル。棣園、鉄之助、五郎兵衛、元春來リ迎フ。黒男祠ニ至ル。家人皆此庭ニ在リ。茂、石舟モ其中ニ在リ。又行厨ヲ發シテ飲宴ス。暮ニ及ンテ家ニ達ス。饗應ヲ設ケタリ。

とある。

これによれば、淡窓の大村からの帰途、筑後の「吉井」では門人の兄である大庄屋石井新作の迎えうけたが、吉井を発つとき門下生諸子が町口で見送った。そして隣の「千束」では門人とその家族が迎えた。さらに日田郡に近い「保木」では門生数十人が出迎えている。日田の地までなお距離を残すこれらの地での、道々の歓迎ぶりはただ驚くばかりである。普段、

日田の地を出ることの少なかつた淡窓師が、それぞれの門下生の郷里を通るのである。大挙して迎える姿に、門下生の師への深い尊敬と思慕が見えるようである。

その後、淡窓一行は日田郡域に入るが、まず「長谷」では範治が門生十人を率いて迎え、ここで行厨を開いている。そして「入江」の浮橋には棣園、鉄之助、五郎兵衛、元春が出迎えた。ここから、さらに歩いて、いわば最後の出迎えの場となつたのが、他ならぬ黒男祠である。

ここには家人皆集まつて行厨を開いた。そして無事に帰宅、ここでも饗應が行われるのである。まさに門人、家族総出での出迎えであった。

星隈山（図1・33）

盆地の西部では星隈山とその周辺にも足を運んでいる。

天保二年（一八三二）

一月十七日。謙吉、東雄、轍、春棣、俊亮ト散歩シテ三郎丸ニイタル。星隈ニノボル。小山ナリ。永山ヲ月隈、亀山ヲ日隈、此地ヲ合セテ三隈ト称ス。但シ此地ハ其説、明白ナラツ。其規模ニ隈ニ比スレハ小ナリ。山上ニ神祠アリ。此ニ息フテ行厨ヲ開ケリ。余、詩アリ。

星隈山はいうまでもなく日隈山、月隈山と並んで日田の三隈と呼ばれたところである。山上には星隈神社があり、全山雜木に覆われ、山脚は花月川に臨み、三隈川との合流点をみることができる。山腹には数十の横穴古墳があり、山麓には大型の横穴式石室を持つ三郎丸古墳がある。



星隈山